

令和 3 年 6 月 7 日現在

機関番号：34315

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2020

課題番号：19K23058

研究課題名（和文）誰／何が思考するのか バタイユ思想を手がかりとした思考と主体についての考察

研究課題名（英文）Who/What Thinks? : A Study of Thinking and Subject Based on Georges Bataille's Thought

研究代表者

横田 祐美子 (YOKOTA, Yumiko)

立命館大学・衣笠総合研究機構・助教

研究者番号：30844170

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、20世紀のフランス思想における主体批判を踏まえながら、バタイユ思想を手がかりに思考と主体の関係を問い直すことで、主体概念の見直しを図るものである。

研究成果としては、著書『脱ぎ去りの思考 バタイユにおける思考のエロティシズム』によって、バタイユの「非知」が理性の主体的な行使なしに成立しえないことが明示され、論文「終わりなき有限性 ジャン＝リュック・ナンシーにおける「外記」としてのエクリチュール」によって、バタイユ思想を引き受けたナンシーにおいて、主体による「書き込み」行為とエクリチュールにおける意味の過剰性との関係が明らかにされた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、西洋近代的な主体概念を痛烈に批判しつつも「深い主観性」などの概念に「主体」という語を残したバタイユに依拠しながら、思考と主体の関係を問い直すものであった。思想史においていかなる語を残すか、いかなる語を使いつづけるかといった問いはジャン＝リュック・ナンシーやデリダなどの脱構築思想につながるものであり、本研究は思想史の枠組みにおいては脱構築思想に分類されることのないバタイユと、のちの脱構築派のつながりを明示できた点に学術的意義がある。

研究成果の概要（英文）： This research aims to revise the concept of the subject by questioning the relationship between thought and the subject based on Bataille's thought, taking into account the criticism of the subject in French thought in the 20th century.

As for the results of this research, the book "Stripping Thinking: Georges Bataille and the Eroticism of Thought" clearly shows that Bataille's "non-knowledge" cannot be established without the subjective exercise of reason, and the article "Finitude without end" reveals the relationship between the act of "inscription" by the subject and the excess of sense in the écriture for Jean-Luc Nancy, who is influenced by Bataille's thought.

研究分野：現代フランス哲学

キーワード：思考 主体 ジョルジュ・バタイユ ジャン＝リュック・ナンシー

1. 研究開始当初の背景

バタイユ思想において独特な思考形態を指す「非知」の思考は、主体の自己同一性が破れる瞬間に生じるとされるが、そうであるにもかかわらず、主体が瓦解したのちには「深い主体性」(subjectivité profonde)が残るとされている。一見すると矛盾とも解されるこの内実を解明するために、本研究では「非知」の思考と主体概念がいかなる関係にあるのかを問う必要があると考えた。このような思考と主体の問題は、バタイユに限らず現代のフランス思想を貫く重要課題のひとつとなっている。折しもバタイユが逝去した後の1960年代以降のフランスでは、構造主義やポスト構造主義、脱構築派の思想家らによって、思考が「私」という審級のもとでなされる知的行為ではなく、デカルト的な主体からの脱却とともに論じられるべきものとなっていた。例えば、バタイユやブランショから影響を受けたミシェル・フーコーは、その初期思想で主体としての「人間の消滅」を語り(cf. Michel Foucault, *Les mots et les choses*, 1966)、主体が自己の外へと脱した次元での思考に「外の思考」という名を与える(cf. Michel Foucault, « La pensée du dehors », 1966. なお、フーコーは後期思想で「主体」の再評価に転じる)。これに対し、フーコーの初期主体論を批判したデリダを擁護し、バタイユ作品の精読をもとに思考を展開したジャン＝リュック・ナンシーは、「非知」を主題とする様々な思考論を著す一方で(cf. Jean-Luc Nancy, *L'expérience de la liberté*, 1988, *Une pensée finie*, 1990, *La pensée derobée*, 2001, etc.)、ブランショをはじめとする著名な論者たちと「主体の後に誰が来るのか」という課題に取り組んでいた(Jean-Luc Nancy, « Après le sujet qui vient : présentation », in *Cahiers confrontation*, n° 20, 1989)。このように、バタイユ思想の継承者たちにとって思考と主体の関係を明らかにすることは共通の課題であったが、それぞれにおいて思考と主体が描き出す関係性は差異を含んだものであった。以上から、本研究はバタイユ思想を導きの糸としながら、近代的な主体を解体した後いったい誰/何が思考するのかという問いを設定するに至った。

2. 研究の目的

本研究はバタイユ思想を手がかりに、20世紀のフランス思想が抱える思考と主体の相関関係という問題に新たな解釈路線を打ち出すこと、ひいては現代の主体批判によって失墜した「主体」という語の地位を見直し、この語の再評価へとつなげていくことを目的とする。具体的には、バタイユの言う「深い主体性」の議論を念頭に置きながら、20世紀のフランス思想における主体批判の内実を、デカルト的な主体概念を解体した後誰/何が思考するのかという問題意識のもとで解明し、「主体」という語をあえて保持したバタイユに即して、この語に積極的な意味や可能性を再度見出すことである。

3. 研究の方法

本研究では、20世紀のフランス思想に見られる主体概念の批判が何を主眼としていたのかを検討したうえで、それでもなお「主体」という語を残す思想家の態度にいかなる思想的背景があるのかを考察するという方法を用いた。また、バタイユやナンシーらが主体批判を行いつつも「主体」という語を保持した理由を明らかにするために、脱構築思想が用いる「古名の戦略」という考え方に着目した。

4. 研究成果

本研究の主な研究成果となるのは、著書『脱ぎ去りの思考 バタイユにおける思考のエロティシズム』(人文書院、2020年)と論文「終わりなき有限性 ジャン＝リュック・ナンシーにおける「外記」としてのエクリチュール」(『関東支部論集』第29号、日本フランス語フランス文学会関東支部、2020年)である。著書では、従来の研究において知の否定を意味すると解されていたバタイユの「非知」を哲学的側面から考察することで、「非知」が推論や言説にもとづく思考形態とは別様の思考であることを明らかにした。この「非知」は一般に、主体の解体や恍惚＝脱自といった用語に結びつけられることが多く、先行研究ではバタイユ思想において主体概念と「思考すること」の双方が批判されているという見方が強かった。しかし、バタイユ自身のテクストに即せば「深い主体性」というかたちで「主体」という語は残されており、独自の仕方での思考もまた探究されている。このことを整合的に理解することが本研究の目的であった。著書では、「非知」が一種の哲学的な思考形態であり、そこには理性を行使する主体がまずもって存在しなければ「非知」の議論そのものが成立しないことを、ヘーゲル哲学などを經由することで指摘した。論文では、バタイユについて論じるジャン＝リュック・ナンシーの「外記」というテクストにもとづきながら、言葉を書き込むという行為と有限性の関係に着目するなかで、ナンシー哲学における主体概念の輪郭線を浮き彫りにした。言葉の書き込みという場面において、主体はそのつど制限づけられた意味を書き込むのだが、まずもってそのような意

味の限界を提示することなしには、意味作用のシステムを超え出る過剰な意味が他者に伝わることもないという事態を明らかにした。そのため、ナンシーにおいても主体がたんに棄却された概念ではないことが示された。

上記二点の主な研究成果から考察されうるのは、バタイユやナンシーが西洋近代的な主体概念に立脚することはなくとも、「主体」という語を別の意味で理解しているということである。それはすべての行為の前段階に確固とした主体があり、それが思考したり言葉を書き込んだりするのではなく、思考すること、言葉を書き込むことによって瞬間的ないしは事後的に生じる主体的な何かを、批判を経由した主体概念のヴァリエーションとして提示している。こうした観点は、バタイユ思想研究においてはこれまで顕著ではなく、むしろナンシーやジャック・デリダ、ジュディス・バトラーなどといった脱構築派の思想家たちや行為遂行性を論じる思想家たちにみられるものであった。そのような点がバタイユ思想に見出されるのであれば、バタイユとナンシーのみならず、デリダやバトラーとの思想的連関も描くことが可能となる。それによって、20世紀フランス思想における脱構築派の潮流を、バタイユを起点に再考するという新たな観点が得られたといえる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 横田祐美子	4. 巻 29
2. 論文標題 終わりなき有限性 ジャン＝リュック・ナンシーにおける「外記」としてのエクリチュール	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 関東支部論集	6. 最初と最後の頁 127-139
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 横田祐美子
2. 発表標題 さらに先へと進んでいくこと バタイユにおける非 知と賭け
3. 学会等名 立命館大学間文化現象学研究センター×東京大学共生のための国際哲学研究センター（UTCP）シンポジウム「ひとはいかにして思考するのか？ バタイユ、ブランショ、ナンシー」（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 横田祐美子
2. 発表標題 終わりなき有限性 ジャン＝リュック・ナンシーにおける他化の運動について
3. 学会等名 日本フランス語フランス文学会関東支部
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 横田祐美子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 人文書院	5. 総ページ数 302
3. 書名 脱ぎ去りの思考 バタイユにおける思考のエロティシズム	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------